令和6年度版「学力向上ポートフォリオ（学校版）」【蓮沼小学校】

①	今年度の課題と授業改善策		
	学習上・指導上の課題		授業改善策【評価方法】
知識・技能	<学習上の課題> 「当該学年の前の学年別漢字配当表に示されている漢字を文の中で正しく使うことができる。」 <指導上の課題> 児童が自らの学びを振り返る時間を確保しているが、児童の自己調整する方法をここに合わせて指導することが不十分である。	⇒	「基礎定着」の時間を設け、児童の実態に合わせてドリルパークやスタディ・サプリ等を効果的に活用し、国語の基礎・基本となる語彙等の反復・習熟に取り組む。【2週間に1度】スタディログ等を使い個別に学習計画を立てる（見直す）時間を設定する。【月に1度】学習の振り返りを実施し、授業において、一人ひとりの児童に合う課題を設定したり、児童が主体的に課題を解決したりする場を設定する【毎授業で5分実施】。
思考・判断・表現	<学習上の課題> 「話すこと・聞くこと」が課題である。 <指導上の課題> 児童一人ひとりに合った自己表現する方法を教師が十分に評価し改善策を提案できていない。	⇒	「話すこと・聞くこと」が課題であるため、様々な教科で、話し手の意図をとらえながら聞き、必要に応じて記録を取り、自分の考えがもてるようにするために、活動の中に共同編集を位置付け、協働的な学びを通して考えたり、表現したりすることができるようにする。【R6年度さいたま市学習状況調査】「学級の友達との間で話し合う活動を通じて，自分の考えを深めたり，広げたりすることができていますか。」の質問事項において【肯定的な回答の割合を90％以上】

②	全国学力・学習状況調査結果について（分析・考察）
知識・技能	国語科の「日常的に読書に親しみ、読書が、自分の考えを広げることに役立つことに気付くことができるかどうかをみる」問題で課題がみられた。問題別解答類型をみると無解答率が高く読書に関しての有用性や効果等について実感していない、また読書の記録から読み取った内容を選ぶことができなかった児童が多いと考えられる。朝読書の活用、作者の記録からの読み取りを活用しながら、自分の考えや友達の考えを共有していく機会をより増やしていく。
思考・判断・表現	算数科では、「データの活用」領域において、「示された情報を基に、表から必要な数値を読み取り式に表し、基準値を超えるかどうかを判断できるかどうかみる」問題に課題があった。問題別解答類型をみると、基準値をこえる計算において間違いをしている傾向もみられた。「数と計算」を定着させるために、学習履歴の活用や個々の課題に合う、ドリルをアプリ等も活用しながら選び、基礎定着タイムで実施していく。

③	中間期報告		中間期見直し
	評価（※）	授業改善策の達成状況	授業改善策【評価方法】
知識・技能	B	「基礎定着」の時間や、授業の最後等に児童自身が ドリルパークやスタディ・サプリ等を活用し、自身の課題に取り組む習慣ができた。スタディログ等やスクールダッシュボードを活用し、学習計画の見直しや授業改善に取り組む機会が不足していた。児童が主体的に課題を解決したりする場を設定することが増えた。	児童の学習計画の見直しのための時間を意図的に設定する。教師が、スタディログを確認する時間を設定する。
思考・判断・表現	B	活動の中に共同編集を位置付け、協働的な学びを通して考えたり、表現するために教育支援ソフトを活用して授業を実施することができた。	変更なし

※評価　A 8割以上（達成） B 6割以上（概ね達成） C 6割未満（あと一歩）

④	さいたま市学習状況調査結果について（分析・考察）
知識・技能	国語科では、結果が向上している学年もあるが全体として、言葉の特徴や使い方に関する事項、「当該学年の前の学年別漢字配当表に示されている漢字を文の中で正しく使うことができる」に課題がみられた。文中の中で意味を理解して書くことができていないと考えられる。算数科では、数と計算に課題が見られる。基本的な計算、小数の計算等が正確にできていないと考えられる。
思考・判断・表現	国語科の「話すこと・聞くこと」において、同集団比較においてR5年度の結果を上回る学年が増加した。教科横断的に話し手の意図をとらえながら聞き、必要に応じて記録を取り、自分の考えがもてるようにするために、授業改善を実施してきた結果だと考えられる。しかし、全体的に正答率が低い傾向があるため継続して指導を続ける。

⑤	評価（※）	授業改善策の達成状況
知識・技能	B	「基礎定着」の時間や「学年・学級」の時間を活用し、児童の一人ひとり合わせてドリルパークやスタディ・サプリ等を効果的に活用し、国語・算数を中心に反復・習熟に取り組むことができた。授業において、一人ひとりの児童に合う課題を設定したり、児童が主体的に課題を解決したりする場を設定するような授業改善を実施した。R6年度さいたま市学習状況調査において、「書くこと」おいて、向上が見られた学年もあったが、全体としては継続して課題である。
思考・判断・表現	B	各教科の活動の中に共同編集を位置付け、協働的な学びを通して考えたり、表現したりすることができるようにする授業改善を進めることができた。【R6年度さいたま市学習状況調査】「学級の友達との間で話し合う活動を通じて，自分の考えを深めたり，広げたりすることができていますか。」の質問事項において【肯定的な回答の割合を5学年88％6学年92％】

※評価　A 8割以上（達成） B 6割以上（概ね達成） C 6割未満（あと一歩）

⑥	次年度への課題と授業改善策
知識・技能	全体的には、知識・技能の定着を見取ることができた。しかし、個人差は大きいことから個別に必要な支援を継続して行っていく必要がある。国語科の「当該学年の前の学年別漢字配当表に示されている漢字を文の中で正しく使うことができる。」では、結果が向上した学年もあるが、全学年での課題であると考える。算数科の「数と計算」において、学年関係なく課題が見られる。「学年・学級」の時間、ドリルパーク等を活用し、漢字学習の反復・習熟に取り組むだけでなく、文章内で意味を考えた活用ができるように授業改善を行う。さらに、他教科でも積極的に漢字を使用するなど方策を実施していく。また、計算練習においても、個々の課題を既習学年のどの系統から起因するものか確認しながら支援を実施していく。さらに、カリキュラム・マネジメントを実施しながら改善を図る。
思考・判断・表現	活動の中に共同編集を位置付け、協働的な学びを通して考えたり、表現したりすることができるようにすることで、「話すこと・聞くこと」の結果が向上した要因と考える。しかし、継続して学校全体としての課題であるため、様々な教科で、話し手の意図をとらえながら聞き、必要に応じて記録を取り、自分の考えがもてるようにするために、授業改善を進めながら全学年で教科横断的・系統的に進める。「学級の友達との間で話し合う活動を通じて，自分の考えを深めたり，広げたりすることができていますか。」で肯定的な回答の割合を維持する。

令和5年度版「学力向上ポートフォリオ（学校版）」【蓮沼小学校】

① 目 標・策

	目 標		策
知識・技能	R4年度全国学力・学習状況調査及びR4年度市学習状況調査の自校結果より国語の「知識・技能」において2pt向上させる。国語科の「知識・技能」において自校テストで80%以上にする。	⇒	毎週「基礎定着」の時間を設け、児童の実態に合わせてドリルパークやスタディ・サプリ等を効果的に活用し、国語の基礎・基本となる語彙等の反復・習熟に取り組む。月に1度、スタディログ等を使い個別に学習計画を立てる（見直す）時間を設定する。
思考・判断・表現	R4年度全国学力・学習状況調査及びR4年度市学習状況調査の自校結果より国語の「思考・判断・表現」において2pt向上させる。R4年度さいたま市学習状況調査「生活習慣に関するアンケート」項目64「国語の授業では、目的に応じて文章を読み、感想や考えをもったり、自分の考えを広げたりしていますか」で肯定的な回答の割合を2pt向上させる。	⇒	毎週「朝読書」の時間を設け、読むことへの興味・関心を高める。オクリンクや共同編集機能等を活用して「協働的な学び」を進める。「相手意識」「視点」「目的」を授業内で児童一人ひとりが明確にできるような発問やワークシートを活用し、探究的な学びのアウトプットの機会を積極的に設ける。
主体的に学習に取り組む態度	学校評価アンケート（児童）における「学習や運動、当番などをしっかり最後までがんばっていますか。」の肯定的な回答の割合を90%以上を維持する。	⇒	教師が児童一人ひとりの学習課題や学習計画を設定できるよう積極的に助言する。また、児童がGIGA端末を活用しながら、自分の学習履歴を把握し、学習の進め方を自ら調整していくことができるよう支援を行う。

② 全国学力・学習状況調査結果・分析

知識・技能	R5年度全国学力・学習状況調査の「知識・技能」において、R4年度の自校の結果と比較し、国語－2.7pt、算数－2.3ptであった。国語では学年別漢字が文の中で正しく使うことができる、送り仮名を文中で正しく使うことに課題がある児童が多かった。算数の「図形」領域において課題がみられた。正三角形の意味や性質の理解していないことが考えられる。
思考・判断・表現	国語の「書くこと」における自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができる問題に課題がみられた。「読むこと」では文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめることができる出題に課題があると考えられるため、資料から読み取ったことを伝え合う活動を重視していきたい。
主体的に学習に取り組む態度	R5年度全国学力・学習状況調査「課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」の質問項目の、肯定的な回答の割合がR4年度と比べると＋4．8ptであった。継続して、子ども主体の学びとなるよう授業改善に努める。

③ 中間期見直し（全国学力・学習状況調査結果分析後）

	目 標		策
知識・技能	変更なし	⇒	全国学力・学習状況調査の結果から学年別漢字配当表に示されている漢字の定着に課題がみられたため、該当学年だけでなく、既習の学年の復習・繰り返しを実施する。
思考・判断・表現	変更なし	⇒	共同編集等をつかい考えのまとめ方や相手に伝わる書き方を児童同士で共有しあい、伝え合う機会を増やしていく。
主体的に学習に取り組む態度	変更なし	⇒	変更なし

④ さいたま市学習状況調査結果・分析

※令和5年度のさいたま市学習状況調査結果は参考値扱いとなります

小3	R5年度さいたま市学習状況調査「思考・判断・表現」において、R4年度調査より、国語　－15．3ptであった。「主語と述語の関係」については、市平均よりも高く、系統立て継続してきた指導の結果であると考える。「当該学年の前の学年別漢字配当表に示されている漢字を文の中で正しく使うことができる。」に課題がある。	小4	R5年度さいたま市学習状況調査「思考・判断・表現」において、R4年度調査より、国語　＋8ptであった。「当該学年の前の学年別漢字配当表に示されている漢字を文の中で正しく使うことができる。」に課題がある。また「目的に応じて，中心になる語や文を捉えて，文章を読むことができる。」にも課題があり、読むことにおいて、教科横断的に指導をしていく必要がある。
小5	R5年度さいたま市学習状況調査「思考・判断・表現」において、R4年度調査より、国語　＋5．7ptであった。「必要なことを記録したり質問したりしながら聞き，話し手が伝えたいことや自分が聞きたいことの中心を捉え，自分の考えをもつことができる。」に課題がある。	小6	R5年度さいたま市学習状況調査「思考・判断・表現」において、R4年度調査より、国語　＋4．8ptであった。「文の中の主語と述語の関係を理解している。」では高い割合であり、系統立て継続してきた指導の結果であると考える。「当該学年の前の学年別漢字配当表に示されている漢字を文の中で正しく使うことができる。」に課題がある。

⑤ 目 標・策の達成状況

		評価（※）
知識・技能	R5年度全国学力・学習状況調査では、R4年度全国学力・学習状況調査より「知識・技能」において－2．7ptであった。R5年度市学習状況調査では、R4年度市学習状況調査より「知識・技能」－0．5ptであった。	B
思考・判断・表現	R5年度全国学力・学習状況調査では、R4年度全国学力・学習状況調査より、国語科の「思考・判断・表現」において－0．8ptであった。R5年度さいたま市学習状況調査「生活習慣に関するアンケート」項目38「学級の友達との間で話し合う活動を通じて，自分の考えを深めたり，広げたりすることができていますか。」で肯定的な回答の割合が90．7（小5）91．3（小6）で、高い割合であった。	A
主体的に学習に取り組む態度	学校評価アンケート（児童）における「学習や運動、当番などをしっかり最後までがんばっていますか。」の肯定的な回答の割合は98%であった。	A

※評価　A 8割以上（達成）　B 6割以上（概ね達成）　C 6割未満（あと一歩）

⑥ 次年度への課題と改善策

知識・技能	全体的には、知識・技能の定着を見取ることができた。しかし、個人差は大きいことから個別に必要な支援を継続して行っていく必要がある。主語述語の関係につては学校全体で系統的に取り組んできた結果が出てきた。「当該学年の前の学年別漢字配当表に示されている漢字を文の中で正しく使うことができる。」においては、全学年での課題であると考える。「基礎定着」の時間、ドリルパーク等を活用し、漢字学習の反復・習熟に取り組む。
思考・判断・表現	「話すこと・聞くこと」が課題であるため、様々な教科で、話し手の意図をとらえながら聞き、必要に応じて記録を取り、自分の考えがもてるようにするために、授業改善を進めながら全学年で教科横断的・系統的に進める。来年度は、「学級の友達との間で話し合う活動を通じて，自分の考えを深めたり，広げたりすることができていますか。」で肯定的な回答の割合を維持する。
主体的に学習に取り組む態度	「学習や運動、当番などをしっかり最後までがんばっていますか。」の肯定的な回答の割合を90%以上を維持していきたい。「勉強は好きですか」という、設問においては、肯定的な割合が低い一方、「コンピュータを使って調べたり，まとめたりする学習をすることができましたか。」「学習の中でコンピュータなどのICT機器を使うのは勉強の役に立つと思いますか。」では肯定的な割合が非常に高い。効果があると児童一人ひとりが考えているため、継続してICTの活用及び、個人のポートフォリオを活用した児童の振り返りを推進し主体的に学習に取り組む態度を育てていきたい。